

## 保育学科によせて

三川 明美

### For the childcare department

Akemi MIKAWA

#### 保育学科の歴史

保育学科の前身である幼児教育学科は昭和57年（1982年）に定員50名の学科として始まった。平成15年（2003年）が幼児教育学科から保育学科に名称変更をした年である。当時は幼児教育専攻と保育専攻の2専攻あり、学生も併せて120名いたように記憶している。平成19年（2007年）に2専攻制をやめ、保育学科として定員を130名に変更した。その後平成22年（2010年）子ども学科ができる時に定員の一部を渡すことになり定員100名の保育学科が誕生したのである。最初はクラス制をとっていたのだが、他学科と同じセミナーチューター制に変更した。これが大まかな保育学科の歴史である。

#### 保育学科での授業

私が食物栄養学科から保育学科という畑違いの学科に引っ越しをしたのは、保育学科に名称変更をした平成15年である。それから今日までの18年間を保育学科で過ごすことになったのである。最初は教員の数合わせのつもりであったのであまり真剣に考えてはいなかった。

ところがそうではないことに気付かされ新しい科目「小児栄養（子どもの食と栄養）」を担当することになったのである。いくら管理栄養士とはいえ、それまでの食物栄養学科でやってきたことは好きな食品衛生の実験であった。それが全く違う栄養学を教えなくてはならなくなった。一からの勉強のやり直しであった。また、子どもに特化していることもこの授業の特徴の一つで、栄養学

を教えればいいというわけでもない。栄養学を知ったうえで、それぞれの各年齢に合わせた食生活の特徴を理解していかなければならないのである。

この授業を教えるにあたり、私なりに一つのテーマを自分の中に掲げた。そんな大げさなものではないが、「子どもたちに健康に育ってほしい」このことに重点を置いて授業を進めていきたいと考えたのである。このことは、授業の最初のオリエンテーションでも学生たちには言っている。それをどのように受け止めてくれているかは一人一人違うと思う。こんな話を聞いて、学生たちにも子どもたちにはどのように育ってほしいかと思うことを心の中にきめてくれればよいなと思っている。

子どもの発達と年齢にはかかわりがある、そのことを知っておかなければならない。子育てはしてきたが何歳で何ができるようになってなど、忙しさを理由に覚えているわけもなく、これもまた一からの勉強であった。特に生歯の時期、手づかみ食べ、スプーンの持てる時期（持つ時期）、箸を上手に使える年齢などなど、食に関わる発達は特に重要な項目として理解しておかなければならない。食と子どもの発達のかかわりを理解することは私にとっての第一関門であった。

離乳食がよくわかっていないことに気付かされた。私自身あまり作った記憶がないのである。これについては研究会などで勉強のやり直しである。赤ちゃんが初めて口にする食べ物である。いかげんなことは教えられない。順を追って、その時期に応じたものを細かく教えていかなければならないのである。これが第二関門であった。

幼稚園指導要領や保育所保育指針も知っておか

なければならない。最初はそれが何なのかもわからなかった。しかし、幼稚園教諭、保育士をめざしている学生を育てるのだからこれらのことを理解したうえで授業をすすめるなければならない。これも一からの勉強であった。管理栄養士？そんなものはどこかに飛んで行った。わからないことだらけのことを教えていかなければならないのだから勉強するしかなかった。保育学科に来たことを後悔したが今更どうにかなるわけでもなく、腹をくくって私の「子どもの食と栄養（小児栄養）」を作り上げていくことに必死の日々であった。

その他にも、病気の時の食事、障害のある子どもたちの食事、児童福祉施設での食事などなど、わからないことを、勉強し、理解し学生に教えていく。勉強しながら、教えるの連続で、最初の頃の学生たちには、申し訳ない気持ちでいっぱいである。

平成17年に食育基本法ができ、食育を学生に指導しなくてはならなくなった、私自身食育が何かわからないので、いろんなところで講演を聞き、いろんな本を読み、自分なりの食育を作り上げ、それを学生に指導していくという手探りの状態であった。間違っではないが三川流（服部先生の本がもとになっています）の食育を学生は学修していることになる。食育は食が関わればすべて食育で、生産から始まりごみのことまですべてが食育なのだが、それを理解してくれる学生がどれほどいるのであろうか。現場に出れば、学生たちはすぐ食育と向き合っていかなければならない。特に保育所では、給食があり、子どもたちの食べたことのない料理も出てくる。そのことを子どもたちに問われて何と答えるのであろうか。「わかりません」ではすまされない。きちんと返事のできるようになって欲しいと願っているのである。そのこともあって少し力を入れているのだが、その時だけの知識の伝達に終わっているのが情けない。

最初のうち授業はパワーポイントを使っていたのだが、学生には不評であった。字を書くことが嫌いな私はできるだけ板書することを避けようとしたのだが、結局板書に切り替えた、それが今の学生には逆に不評でパワーポイントのようなきちんとしたものを好むようになってきたのは、何とも皮肉なことである。しかし、今更パワーポイン

トを作る元気も残っていないのが現状で、学生たちには我慢してもらうしかない。

教える内容も、時代の変化とともに少しずつ変化してきた。最初は手伝ってくれる人がいたこともあり、調理実習（離乳食、幼児食、行事食）を授業の中に取り入れていたが、手伝ってくれる人も異動でいなくなり、一人では目が行き届かないので危険なこともあり調理実習をやめてしまった。簡単な離乳食づくりと調乳の実習はしばらく続けたが、ここ2年はコロナの関係で、調乳の実習さえ行えない状態になってしまった。

こんな調子で授業を進めてきて18年、私なりの授業「子どもの食と栄養（小児栄養）」ができるようになってきた。まだまだ、勉強不足のことはたくさんあるし、学生たちに教えたいこともたくさんある。

半人前の私にできることを精一杯、学生に理解してもらえるよう努力していくしかないのだと思っている。もっと何か私にもできることがあるのではないかと、授業を終えるたびに反省の日々である。

## 保育学科と学生

学生はこの18年間で変化してきたのであろうか。私が年を取っただけなのであろうか。

授業中の学生に覇気がない気がするのは私の教え方なのだろうか。この間やったばかりの質問にも答えられない。授業を自分にもものにできていないのは、教え方が悪いのだろう。学生の理解を十分確認しないまま、先へ先へと進んでいるのだらう。だが、その日やったことのレポートはしっかりと仕上げてくれるので、全くその日の授業を理解していないわけではないようだ。

私の恩師が「一生青春、一生勉強」といっておられた言葉を思い出すと、私は勉強が足りていないのだと思う。だからいつまでたっても半人前の授業しかできていない。そのことを学生は敏感に感じ取っているのだろうと思う。だから教えたことが身につかないのだろうと思う。

私は学生の顔と名前を覚えるのが苦手である。覚えたと思ったら2年は過ぎていき新しい2年が始まりまた一からである。声をかけてくれる卒業

生や学生に申し訳ない思いでいっぱいである。年と共にこれはひどくなってきている。覚えようという気力さえ年齢は奪っていくものなのであろうか。覚えようと一応努力はしているが、中途半端に終わり、1年が過ぎ2年生になったら授業もないので、覚えられないまま卒業を迎えるという悪循環が続いている。

### 終わりに

この18年という年月の間に変わったことは、私が年を取ってきたことだけで、学生は何も変わっていないのだと思う。明るく、楽しく保育学科での2年間を過ごしてくれているのだと思う。勉強、アルバイト、実習と追われながらも自分流を貫いている強い学生たちがそこにはいる。これは間違いなくこの18年間変わっていない。